# 泉南地域の文化的境界把握のための試論

## ―樫井川・田尻川における祭礼形態の違いを中心として―

吉村旭輝

### はじめに

大阪府の泉南地域（泉南郡：現在の岸和田市から岬町）の各神社では秋祭りが行なわれる。これら秋祭りには江戸時代中期以降地車（だんじり）ややぐらといった囃子屋台が各町・各地区から出される。[1]

これらの地域は江戸時代、北は現在の岸和田城下町を中心とした岸和田藩、南はおおむね天領（幕府領）（各村で時代により違いあり）であったことからその祭礼形態に違いがみられるとされている。とくに泉佐野市の犬鳴山から大阪湾に流れる樫井川や田尻町を流れる田尻川が境界と考えられている。とくに田尻川では北岸の嘉祥寺地区が地車を曳行し、南岸の吉見地区がやぐらを曳行しており、これら地区の氏神である春日神社の秋祭りでは、地車とやぐらが同時に曳行される珍しい祭礼形態となっている。

このことについて『田尻町史』では、「もとはこのあたりを治めていた殿さまが嘉祥寺と吉見では違う」ためであ

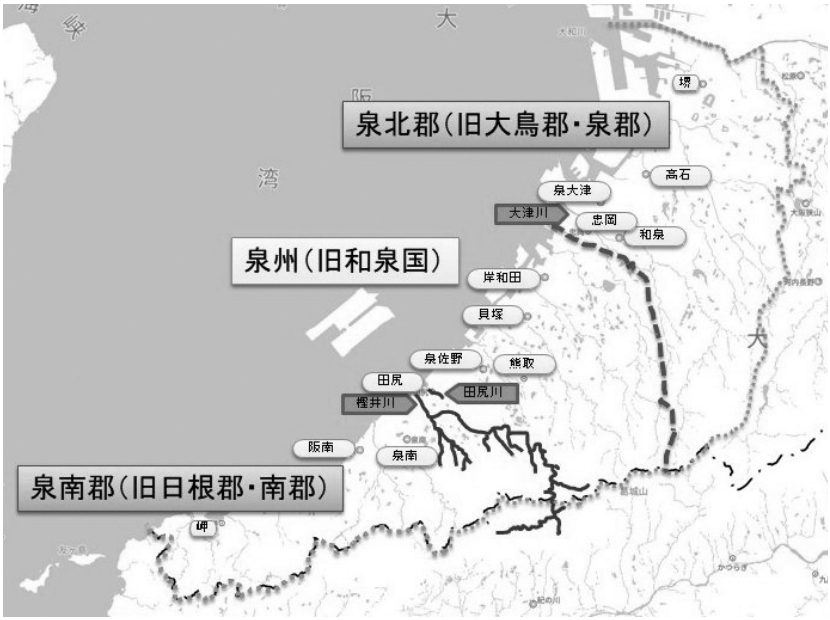


図1　泉州地域（旧和泉国）と樫井川・田尻川（国土地理院の地理院地図Vectorを加工して作成）

るという地元の言説を用いて説明している。[2] またやぐらを出す地区の多くは、田尻川を境に「北は大阪の文化」、「南は和歌山の文化」というように、地元では明確な違いをかつての治世やそれにともなう文化の違いにあてはめて説明することが多い。[3]

ここでは、まず地車およびやぐらの分布、およびそれら祭礼形態にまつわる『田尻町史』に記された言説をもとにして、祭礼形態の違いを明示したい。その上で、樫井川および田尻川沿岸の歴史的および文化的変遷を念頭に置きながら、現在にいたる泉南地域の祭礼形態における文化的境界がいつ、どのような地域からの影響を受け、形成されてきたかを、明らかにしたい。

また本論考は、地域の政治的、経済的背景をもとに現代に残る祭礼形態から地域文化の境界を把握するための試論として位置づけたい。

## 一　泉南地域の祭礼の歴史と現在

### 一－一　樫井川北岸以北の地車

大阪府の泉南地域では、地車が曳行される祭礼とやぐらが曳行される祭礼、山間部の担いだんじり、そして、海岸部の布団太鼓と呼ばれる太鼓台が舁かれる祭礼が存在している。地車は大坂城下町中心に行なわれていた天神祭で十七世紀後半に登場したことが契機となって、十八世紀後半、一気に大坂城下町の町人や商人たちによって拡がった。[4] さらに以後、大坂城下町周辺の村々や街道筋にまで拡がっていった。それを岸和田城下町である北町が紀州街道の北側にあたる大津村（現泉大津市）より借用したことがきっかけとなって、岸和田城下町の牛頭天王社祭礼で前方の大屋根が上下するからくりのついたいわゆる「岸和田型」地車に改良して曳行されるようになっていった。[5] こうした祭礼形態は、以降旧藩内および周辺の各農漁村部にも拡がり、数多くの地車が曳行されるようになっていった。

写真1　岸和田祭の地車（だんじり）（岸和田市北町）

その「だんじり祭り」の中心にあたるのが岸和田城下町で行なわれる岸和田祭である。岸和田祭は町方、浜方、村方の氏神である神明社と天正年間（一五七三－九二）に沼村から勧請したとされる牛頭天王社の二社（現在の岸城神社）、および沼村の沼間将監が正平十七年（一三六二）に勧請したとされる天神社（現在の岸和田天神宮）の祭礼を含む祭礼とされる。

当初の岸和田祭は大坂城下町を見聞してきた北町の茶屋新右衛門が大坂城

下町の祭礼を真似て家々で献灯をはじめただけであったが、延享三年（一七四六）には町方の五町（北町、魚屋町、堺町、本町、南町）が作り物を乗せた「引壇尻」を出すようになる。またのちの岸和田祭にあたる牛頭天王社の祭礼ではないが、岸和田城内に元禄十六年（一七〇三）に勧請されていた稲荷社（現在の三ノ丸神社）での寛延三年（一七五〇）九月二十六、二十七日の祭礼では、村方と浜方が祭礼番をつとめ、浜方の北中町が「大神楽（子共まわし）」、土居側町が「御神輿の形（子共てうちん持、太鼓打）」、中之浜が「子共相撲（引だんじり）」を務めている。[6]

さらにその二年後の宝暦二年（一七五二）に行なわれた御宮（牛頭天王社）の祭礼には各町から以下の練物が出されている。[7]

みこし壱組　　北裏町
引だんじり（はやし方）　　中町
小だんじり（人形乗せ）　　北大手筋
引だんじり（作り物乗せ）　　中之裏町
荷ひだんじり（太鼓たたき）　　大工町
引だんじり（土俵積）　　中之浜

このように初期の岸和田祭にはさまざまな形態の「だんじり」が出され、祭礼としての「かたち」が整えられていった。その後天明五年（一七八五）の大津村からの古檀尻の移入をきっかけとして、各町から出される地車が増加し、寛政二年（一七八九）には三所（町方、浜方、村方）が隔年で出すような決定も下されている。ちなみにこのころ出されていた地車には俄（にわか）がついており、地車内部で俄が行なわれていたと考えられる。[8]

そして文化・文政期（一八〇四－三〇）の地車とされている旧五軒屋町地車が昭和六十二年（一九八七）に京都で発見されたことから、この時期以降は旧五軒屋町地車と同様の形態である岸和田型地車が曳行されるようになってい

ったと考えられている。ちなみに江戸時代に製作された地車も数台現存しており、天保十一年（一八四〇）に中町で製作された地車は和歌山県橋本市東家で、また安政三年（一八五六）に大北町で製作されたとされる地車は東大阪市角田で、さらに文久二年（一八六二）に大工町で製作された地車は泉佐野市長滝中ノ番でそれぞれ今なお曳行されている。また天保十二年（一八四一）に紙屋町で製作された地車は平成二年（一九九〇）まで同町で曳行されたのち、岸和田だんじり会館で展示されている。

江戸時代、城下町以外の各村でも祭礼が行なわれていたが、神輿渡御を中心とする農漁村祭祀を中心とする秋祭りが盛んに行なわれていたと考えられる。熊取町のように江戸時代から地車が曳行されている地域もあるが、その多くが明治以降、旧城下町以外でも岸和田型地車が曳行されるようになっていったと考えられる。[9] 現存する岸和田型地車でもっとも古く、岸和田城下町以外の村によって新調された地車は、池尻村（現岸和田市池尻町）で新調された地車である。この地車は現在堺市東区日置荘西町東部で曳行されている。

写真2　旧農村地域に今も残る神輿渡御（泉大津市豊中町・泉穴師神社）

### 一－二　泉州地域山間部の担いだんじり

泉佐野市の山間部にあたる大木地区では三台の担いだんじりが舁かれている。担いだんじりは先述した岸和田城下町での祭礼にあたる宝暦二年（一七五二）の御宮（牛頭天王社）の祭礼を記した「諸事覚日記」にも大工町が「荷ひだんじり」を出していたことが記されている。[10] この史料に記された「荷ひだんじり」と大木地区の担いだんじりが

同様の形態であるかどうかは不明である。岸和田型以外の地車には担い棒がとりつけられており、今でも地車を担ぐ地域もみられる。そのため、担いだんじりではなく、狭い道路で単に地車を担いだだけであるとも考えられるが、この時代にはまだ統一した型式はなかったものと考えられる。文献上担いだんじりはかつての岸和田藩領内の史料にも一部みられ、明確な史料が残されていないものが多い。また史料もなく、地元の伝承として担いだんじりを出していたとする地域も多い。史料および地元での伝承をまとめた先行研究が指摘しているものを挙げると次のとおりである。[11]

（岸和田市田治米町（南郡田治米村[12]））
（岸和田市土生滝（南郡土生滝村[13]））
（貝塚市半田（南郡半田村[14]））
（貝塚市窪田（日根郡窪田村[15]））
熊取町和田（日根郡和田村[16]）
熊取町朝代（日根郡朝代村[17]）
（熊取町成合（日根郡野田村[18]））
（泉佐野市長滝中ノ番（日根郡長滝村[19]））
（泉佐野市長滝東ノ番（日根郡長滝村[20]））
（泉佐野市野添（日根郡長滝村[21]））
（泉佐野市安松（日根郡安松村[22]））

写真3　担がれる猪飼野の地車
（大阪市生野区桃谷・御幸森天神宮）

写真4　担いだんじり
（泉佐野市大木・火走神社）

（泉佐野市上之郷中村（日根郡上ノ郷村[23]））
（泉佐野市上之郷下村（日根郡上ノ郷村[24]））
（泉佐野市母山（日根郡上ノ郷村[25]））
（田尻町嘉祥寺北出・西出・上出（日根郡嘉祥寺村[26]））

このように熊取谷以外は根拠に乏しいが、地元で伝承されている担いだんじりの痕跡は多い。実は担いだんじりは、和歌山県橋本市橋本や隅田八幡宮の祭礼で現在でもみられる[27]。紀の川筋では近年泉州から購入し、同型の地車に変更された地域も多いが、学文路地区などでもかつては担いだんじりが主流であった。担いだんじりの形状は地区によって違いがあるため、そうした分析も今後必要になると考えられるが、こうした担いだんじりを祭礼で出す文化は泉州の山間部から紀の川流域にかけて、江戸時代後期以降の主流であったことも考えられるのではないだろうか。

写真5　泉南地域のやぐら（波太神社・山中渓）

### 一－三　樫井川南岸以南のやぐら

樫井川や田尻川南岸以南の泉南地域で曳行されているのがやぐらである。このやぐらは地車とは違い（一部の地区ではやぐらを「地車」と表記する場合もあるが、ここでは四輪の地車と二輪のやぐらで便宜上分けて表記する。）、二輪の車輪（コマ）が付けられており、十月に行なわれる各地区の神社の秋祭りで曳行されている。とりわけ盛大に行なわれているのが阪南市と泉南市のやぐらの曳行である。いずれも行政主催のやぐらパレードが十月第一日曜日に開催されており、阪南市では現在、市内全域の二十台のやぐらが阪南市役

所周辺に集結する。

また泉南市でも同じく十三台のやぐらが泉南市総合福祉センター（あいぴあ泉南）に集結し、泉南市役所までの五百メートルをパレードしている。これらのパレードはいずれも平成に入ってから開始されたもので、阪南市では十月第二日・第三月曜日に行なわれる波太神社の秋祭り（十八台）と指出森神社の秋祭り（三台）が行なわれている。また泉南市も阪南市と日程は同じで信達神社（三台）、岡中神明神社（一台）、久保神社（一台）、里外神社（四台）、茅渟神社（四台）、一岡神社（二台）、市場稲荷神社（一台）、鹿島神社（一台）、諏訪神社（一台）、男神社（二台）の秋祭り（計二十台）でそれぞれやぐらが曳行されている。また田尻町（一台）、泉佐野市（二台）、岬町（八台）を合わせて、泉南地域全域で合計四十九台のやぐらが曳行されている。

これらやぐらが曳行されているのは大阪府泉佐野市を流れる樫井川と田尻町を流れる田尻川以南の地域であり、大阪府最南端にあたる岬町小島のやぐら（平成十三年（二〇〇一）に深日から譲渡され、曳行開始）が最南端となっている。

泉南地域のやぐらに関する史料としては、泉南市にあたる旧樽井村の元治元年（一八六四）九月「樽井村祭礼規定」がある。そこには挑灯講、獅子講、吾妻中、福中、浜中の各地区がやぐらを出していたことが記されている。[28] また『樽井町誌』にはそれ以前からやぐらがあったことも示唆されている。[29] さらに当時のやぐらも現存している。それが現存最古とされる泉南市の樽井地区で茅渟神社に宮入をする戎福中講のやぐらである。このやぐらは文化・文政期（一八〇四－三〇）～元治元年（一八六四）の間に新調したものとされており、屋根の中央部に地車とは異なる大きな唐破風をもつ「樽井型」と呼ばれる独特なやぐらである。この樽井型のやぐらは、遅くとも十八世紀後半までには曳行がはじまったことが史料から把握でき、その後地車の屋根型に影響をうけたやぐらが各地で改良されて曳行されるようになっていったと考えられる。

江戸時代以前は現在の泉佐野市・田尻町域の一部にあたる那珂(中)郷、阪南市域にあたる鳥取郷、泉南市域にあたる信達郷(荘)、そして岬町域にあたる資母(下)郷と深日郷が泉南地域には存在していた。とりわけ鳥取郷では波太神社、信達郷では金熊権現社(現在の信達神社)を中心にそれぞれ大宮座が存在し、郷・荘単位での大祭礼が江戸時代には行なわれていた。[30] 現在、行なわれている阪南市と泉南市の祭礼はこれが原型となっているため、郷単位で多くのやぐらが一堂に会する大規模な祭礼となっている。

泉南地域のやぐらの曳行は現在、泉州で曳行されている地車と同様の組織形態で運営されていることが多い。泉州では高校生から二十代後半までが若者組にあたる青年団、二十代後半から三十代後半までが組、そして三十代後半から四十代後半までが若頭会となり、各地区でその名称や年齢に誤差はあるものの、この三団体が曳行の実働部隊となる。[31] とくに青年団は後方の小屋根の下に取りつけられた太鼓とそれを立って叩く叩き手、またその周囲で奏される篠笛で構成される鳴り物とやぐら前方に取りつけられた梶台をしゃくり、伊勢音頭をはじめとしたさまざまな「やぐら唄」を歌いながら曳行する。

つぎに、このやぐらを主体とした阪南市と泉南市の秋祭りをみていきたい。阪南市の波太神社では先述の阪南市やぐらパレードとその前日の土曜日は試験曳きとされ、パレード以外は各地区のみの曳行で翌週末の祭礼にむけての調整を行なう。試験曳き翌週にあたる毎年十月の体育(スポーツ)の日の前日と体育(スポーツ)の日は宵宮、本宮となる。宵宮では各地区のやぐら十八台が波太神社に宮入を行なう。宮入の際、各やぐらは拝殿前の石段を一気に駆け上がる。これは「宮上がり」と呼ばれ、二輪のやぐら独特の豪快な光景が繰り広げられる。宮入は「宮本」にあたる尾崎宮本町を一番に尾崎地区四台、貝掛・旧西鳥取地区五台、旧東鳥取地区九台の順で、午前八時から夕方の十六時三十分まで行なわれる。宮入を終えると南海本線・箱作駅前のロータリーで十八時から若頭会と組によるセレモニーが行なわれる。

翌体育（スポーツ）の日は本宮にあたる。波太神社では神事が行なわれ、その後本神輿一基と二基の喧嘩神輿の合計三基の神輿が海老野の浜まで渡御を行なう。これは江戸時代からつづく神輿の浜渡御であり、江戸時代は二月初午の日に行なわれていた。波太神社ではこの二月と六月の丑の日に祭礼が行なわれており、六月丑の日の祭礼にやぐらを境内に曳き入れた記録が残っている。神輿の担ぎ手は各地区から輪番で決まっており、当番以外の地区のやぐらも浜にむかう。神輿還御後は各地区それぞれの地区内を曳行し終了となる。また、下荘地区（貝掛、箱作西、箱作東）のみ、菅原神社へ宮入を午後に行なっており、宮入ののち夜には箱作駅駅前ロータリーで青年団によるイベントを行なっている。[32]

泉南市では先述のとおり、全体で二十台のやぐらが曳行されている。とりわけ大宮座制があった信達神社の秋祭りでは江戸時代まで、信達郷の郷社である金熊権現社（旧九月十六日）と各村の村社の祭礼（旧八月十八日）が行なわれていた。明治時代以降もその形態は維持されていたが、昭和四十年代に宮本であった金熊寺のやぐらの曳行が中断したため、それぞれ残った地区のやぐらは村社に宮入をするようになった。しかし、平成十七年（二〇〇五）に金熊寺のやぐらが復興を果たし、信達神社（元金熊権現社）に宮入をするやぐらも戻りつつある。現在信達神社への宮入は三台（金熊寺、馬場、牧野）ではあるが、岡中、市場、大苗代、童子畑など旧信達郷のやぐらもそれぞれの村社を中心に曳行をつづけている。なお波太神社同様本宮には前神輿（金山彦命）、主祭神である中神輿（神倭磐余彦命）、後神輿（伊邪那美命）の三基の神輿が樽井浜まで渡御をしていたが、昭和三十年代を最後に行なわれていない。[33]

写真6　田尻川と吉見地区のやぐら

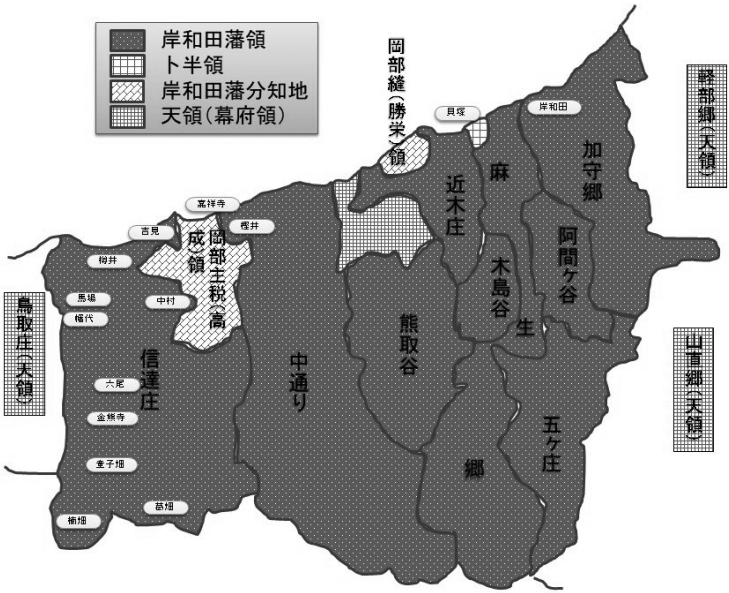


図2　貞享元年(1684)岸和田藩検地図(落合保(1977)『岸和田藩志』東洋書院の附図をもとに作成)

このようにこれらの地域では江戸時代以前からつづく大宮座制を中心に神輿渡御を主体とした祭礼が行なわれており、江戸時代後期にはやぐらが登場し、各村の濃密な座としてのつきあいがもととなり、若者組および明治以降の青年団を中心として泉南地域では江戸時代後期から明治時代にかけてやぐらが一気に拡がっていったと考えられる。

## 二　泉南地域の文化圏とその歴史

泉南地域は「殿さまが違う」という『田尻町史』が用いた言説からもわかるとおり、江戸時代は岸和田藩領とそれ以外(大半が天領(幕府領))にわかれた統治機構をもっていた。その違いも祭礼形態に反映されていると考えられるが、樫井川南岸以南では地域の郷・荘単位での祭礼形態が残っているように、これらの地域では中世以前からの独自の文化圏が存在しているといえるのではないか。ここからは江戸時代から中世にかけて、さかのぼりながら樫井川南

岸以南の地域をみていきたい。

## 二－一　江戸時代の泉南地域

江戸時代の所領配置をみた場合、岸和田藩に寛永十七年（一六四〇）岡部宣勝が入部して以降、大きな変遷はないが、各村単位でみた場合、変遷がみられる。とくに正保二年（一六四五）の『正保村高帳』には、岸和田藩は南郡の塔原村―春木村（現岸和田市）にかけての南北のラインを境に領有し、西は信達郷（荘）（現泉南市）と鳥取郷を境に領有していたことがわかる。[34] またそれら以外の泉州地域の多くは天領（幕府領）であったことがわかるが、この時点では田尻川も含む樫井川両岸は岸和田藩領であったと考えられる。

寛文元年（一六六一）、宣勝は、次男高成と三男豊明に分知を行なった。その結果、樫井村、岡本村、嘉祥寺村（一部）、吉見村、兎田村、別所村、そして信達郷の北野村、中小路村、新家村を高成が領有することになった。これらの領地は高成の孫にあたる広高まで継いでいたが、広高は享保五年（一七二〇）に失神し、死去する。そのため領地は幕府に収公され、以降は天領（幕府領）となった。[35]

収公された村々の多くは、樫井村、嘉祥寺村を除きいずれも今ではやぐらを出す（出していた）祭りを行なう地域（兎田村は江戸時代やぐらを所有せず、明治以降に地車を所有）である。こうした祭礼形態の違いは、近・現代になってから表出するものと考えられるが、岸和田藩領と天領（幕府領）の違いによって文化的境界の名残を垣間みることができる。

しかし、のちにやぐらを出す信達郷にあたる樽井村、中村、幡代村、馬場村、六尾村、楠畑村、童子畑村、金熊寺村、葛畑村はその後も岸和田藩領であった。樽井村を除き、そのいずれもが、やぐら曳行の記録は明治以降のものしか残っておらず、江戸時代にどのような形態で祭礼が行なわれていたかは不明である。たとえ明治以降にやぐ

らを祭礼に取り入れたとしても樽井村では江戸時代からやぐらが出されており、領地支配の関係ではなく、近隣(信達郷)の地縁による結びつきによって類似した形態、つまりやぐらを用いた祭礼を導入していったことも考えられる。こうした結びつきの背景には何があるのであろうか。そこには江戸時代の領地の違いだけでは把握できない、中世以来の文化圏の違いが関係している可能性があるのではないだろうか。

そこでつぎに、田尻川を中心に「北は大阪の文化」、「南は和歌山の文化」という言説に注目したい。この言説は単に祭礼形態での北＝地車と南＝やぐらということを表現しているのであって、明確に確証をもった言説ではないと考えられる。しかし、それ以外に重要な田尻川両岸ならではの問題が内包されていると考えられる。

和歌山にはやぐらおよびそれに類似する囃子屋台は確認できない。可能性があるとすれば、元和八年(一六二二)に創始され、和歌山城下町が練物を出して行なわれる紀州東照宮の和歌祭、あるいは享和元年(一八〇一)の日前宮の砂持である。しかしいずれも泉南地域のやぐらを連想させるような囃子屋台は史料や絵巻には描かれていない。考えられるのが、『日前宮砂持絵図』に描かれている、大きな二輪の車輪をつけた屋台ぐらいである。[36] この日前宮の砂持は日前宮の「道作り」(道普請)として城下町の各町が趣向を凝らした屋台に砂を積んで瓦町から秋月村の入口まで運ぶという行事で、周辺地域から多くの観客を集める行事として盛大に行なわれた。ここには多くの町が二輪の屋台で砂を積んでいるようすが『日前宮砂持絵図』に描かれている。ただし、やぐらとの共通点は二輪と車輪の形状が共通するということだけであり、これが「和歌山の文化」とは明確にいえないであろう。

また、泉南地域では和歌山城下町ではなく紀の川筋から熊野街道沿いにやぐらが移入されたとされている。紀の川筋には四輪の粉河祭の車楽(だんじり)があり、また現在の橋本市から泉佐野市の山間部にかけては先述の担いだんじりが存在している。とくに橋本市の隅田八幡宮では赤塚村の田中家文書に「雨請願満小踊　御祭礼段尻入用割符取立帳」(明和四年(一七六七))が残されており、江戸時代中期にはすでに「段尻」が存在していたことがわかる。[37] こ

写真７・８　【左】担いだんじり（泉佐野市大木）と【右】やぐら（阪南市自然田上組）

うした「段尻」が泉南地域に入り込んだかどうかは不明ではあるが、紀の川筋には泉州地域とは別の「だんじり」が存在していたことも考えられる。泉州の多くの地域で担いだんじりが舁かれていた記録が残っていることもあり、担いだんじりが和泉山脈を越えて移入されたことも考えられるし、また泉南地域ではそういった言説をよく耳にする。実際に泉佐野市大木の担いだんじり、やぐらともに土台部分は、幕式であり形状も類似している。そのため、担いだんじりに二輪の車輪をつけて移入されたことも十分考えられる。

明確な資料による裏付けが取れないのが現状ではあるが、樽井型以外のやぐらの上部の構造は、むしろ大阪の地車に類似しており、そちらの方がより近いといえる。そのためここでいう「南は和歌山の文化」という言説は、担いだんじりの移入に基づいた言説であり、上部の構造はのちに地車の影響を受けて、変化したことも考えられる。実際、樽井型やぐらの屋根の形状は橋本市隅田八幡宮の橋本型といわれる担いだんじりの形状に近い。そのため、元のやぐらは地車とは全く異なる樽井型に類する形状であったと考えられる。また、やぐらと地車の違いに象徴されるように、広い意味での地域の文化的境界を表現している言説に発展していったとも考えられる。そのことを示すような出来事が元文二年（一七三七）に生じている。同年、吉見村が田尻川下流に打ち込んでいた杭木を嘉祥寺村が抜いたことから争論となる。この争論は寛保三年（一七四三）に大坂町奉行所で裁決が下り、落着となる。[38] こうしたことがきっかけとなり、

文化的境界を示す言説が地車とやぐらの違いを表象するものとしてより強調されるようになっていったのではないかとも考えられる。

これらを前提として、泉南地域の文化的境界について次節で時代をさらにさかのぼって考えてみたい。

## 二－二　十六世紀の泉南地域

泉南地域は中世以来、その領有をめぐって争いが繰り広げられてきた場所でもある。九条政基が文亀元年（一五〇一）から永正元年（一五〇四）まで、自領であった日根荘に滞在した記録である『政基公旅引付』には、政基が根来寺閼伽井坊明尊に荘園の管理権である代官職を譲ったことによる、根来寺衆と和泉国守護方細川氏との度重なる争いのようすが記されている。とくに樫井川流域はその只中にあたり、根来寺と守護方の争いが繰り広げられた。[39]

また、天正十三年（一五八五）の羽柴秀吉の紀州攻めにより、根来衆が敗れるまで根来寺の支配はつづく。こうした根来寺の基盤には根来寺を本拠とする根来衆や浄土真宗の雑賀坊（現鷺森別院）を本拠とする雑賀衆といった紀伊国の宗教勢力があった。その宗教勢力の泉南地域での拠点にあたるのが貝塚で寺内町を形成していた海塚坊（現願泉寺）である。海塚坊は大坂本願寺戦争（石山合戦）ののち、顕如が天正十一年（一五八三）七月に同坊へ移ったことから、天正十三年の秀吉の紀州攻めによって和歌山の雑賀坊に下るまで、本願寺としての役割を果たした寺院である。海塚坊もまた、顕如が来訪する以前から泉南地域の浄土真宗門徒の中心寺院であり、その紐帯となっていた。

大澤研一は「和泉一国の門徒・寺院を海塚坊の与力と推定したが、一方で日根郡南部が同坊の管轄地域から外れていた」と指摘している。[40] さらに天文十九年（一五五〇）の証如の紀州来訪からの帰路に紀州の者が八丁畷（泉佐野市岡本）まで随行したこと、また天正十一年の顕如来訪の際の警固をつとめた雑賀衆が嘉祥寺まで随伴していることから「およそ嘉祥寺付近を境に北は海塚坊、南は雑賀坊が管轄していたものと推測される」としている。この大澤の

指摘での門徒の管轄範囲の境界は、まさに田尻川を境界としており、こうした境界線が、根来寺の管轄と和泉国守護との争い、またその後の浄土真宗の門徒の管轄わけによる門徒の勢力範囲が、十六世紀の段階で形成されていたことが考えられる。そうして形成された文化的境界は、江戸時代以降も同地の人びとのなかに残りつづけ、くしくも享保五年(一七二〇)の幕府による岸和田藩領地の収公により、同藩の支配下から離れたことで元の境界が統治機構にも表れるようになる。さらに田尻川両岸では、杭木の争論などをとおして、のちに岸和田城下町の祭礼形態である地車とは違う、やぐらという独特の祭礼形態を和歌山からの担いだんじりの転用から生み、それを文化的境界の象徴としていったといえるのではないか。

## おわりに

本論では、樫井川および田尻川を中心として泉南地域の地車およびやぐらの現在の分布範囲の境界からどこまで文化的境界を見出すことができるのかを、その地域支配の変化、そしてそれに基づいた地域の歴史から考察してきた。これら祭礼に出される囃子屋台は、これまで「文化財」としての価値付けもなされてこなかったこともあり、史料自体が残されていない場合が多い。また、少子化による担い手不足によって祭礼自体の休止や廃絶といった状況も起こり、その痕跡は失われつつある。さらに、泉州地域のさまざまな地区では、地車ややぐらの売買が交わされ、祭礼の文化圏は泉州地域以外にも波及しつつあるため、祭礼形態から把握する文化的境界がより複雑化している。

本論はこうした状況を踏まえ、祭礼形態を糸口として地域の歴史からその文化的境界を明らかにしようと試みたものである。江戸時代の岸和田藩領と天領(幕府領)による祭礼形態の相違、そしてそれらを文化面からみた場合、

十六世紀からつづく、文化的境界が指摘できるのではないかという試みである。これらの把握にはもちろん各町・各地区での緻密な時代ごとの変遷をふまえた調査が必要である。本論はそのための試論として位置づけ、本論をもとに各町・各地区の調査に基づいた詳細な研究を進めていきたいと考えている。

註

（1）「囃子屋台」の分類は、植木行宣（二〇〇一）『山・鉾・屋台の祭り』白水社にしたがった。

（2）田尻町史編纂委員会編（二〇〇八）『田尻町史』民俗編、田尻町参照。

（3）例えば『阪南市の祭・やぐら』「やぐらについての概要」（HP：http//yagura.main.jp/yagura/yagura/index.html）。

（4）明珍健二・緒方裕子・谷直樹（二〇〇〇）「天神丸の曳船―天神丸の沿革と復原に関する研究―」『大阪市立大学生活科学部紀要』四八、大阪市立大学生活科学部。および大阪天満宮所蔵文書より森田怜が抜粋した「天満宮地車宮入地車番数表」を参考とした（森田（二〇二一）『日本だんじり文化論』創元社）。

（5）北町「当町壇尻濫觴五町御城先後之一件書付写」文化五年（一八〇八）―嘉永二年（一八四九）池田谷久吉収集岸和田地車資料（永野仁編（一九七九）『だんじり祭関係史料集（岸和田市史史料第二輯）』岸和田市）所収。

（6）「諸事覚日記」高井家文書（永野編　一九七九）所収。

（7）註6参照。

（8）俄とはさまざま場所で演じられる即興芝居のことで、大阪では地車の上で演じられていた。現在でも南河内を中心に俄が地車の上で行なわれている。俄についての論考は西岡陽子（二〇一七）「祭礼俄の諸相と実際」植木行宣・樋口昭編『民俗文化の伝播と変容』

などがある。

(9)明治以降の各町・各地区への地車(だんじり)の拡がりは、吉村旭輝(二〇二〇)「泉州地域におけるだんじり祭りの現在―少子・高齢化と用具の変容―」『近畿民具』四二、近畿民具学会で考察している。

(10)註6参照。

(11)実地調査および岩根淳(一九九二)『泉州地車往来』私家版。また岩根淳「山車・だんじり悉皆調査」(HP:http://www5a.biglobe.ne.jp/~iwanee/index.htm)を参考とした。岩根による考察は聞き取り等を中心としており、不確定なものも多々あると考えられるが、地元の伝承をもととしているため、一概に否定することも難しい。そのため、岩根の調査結果も挙げた上で括弧を入れた。

(12)註11の岩根の調査によるが、根拠に乏しいため、括弧を入れた。

(13)文政十二年(一八二九)の「両滝村壇尻宮入等前後の申合下書」奥家文書(永野編　一九七九)には「土生滝村ニ此度壇輾出来仕候」とあるが、担いだんじりとは断定できない。註11の岩根は「三先代は担い地車。」としているが、根拠に乏しいため、括弧を入れた。

(14)註11の岩根の調査によれば、「大正6、7年に購入の担い地車で道が悪いとこは担いだ。」としているが、根拠に乏しいため、括弧を入れた。

(15)註11の岩根の調査によれば、「道がいい時は曳き、悪い時は担いだ」としているが、根拠に乏しいため、括弧を入れた。

(16)天保十二年(一八四一)の「熊取谷壇尻書上げ」中家文書(熊取町史編さん委員会編(一九九五)『熊取町史』史料編Ⅱ、熊取町)には「一荷壇尻　天保四巳年右同断(初而出来候)　和田村」とある。

(17)天保十二年(一八四一)の「熊取谷壇尻書上げ」中家文書(熊取町史編さん委員会編　一九九五)には「一荷壇尻　朝代村」とある。

(18)註11の岩根の調査によれば、「担い地車があったが、明治後期にまくって廃絶した。」としているが、根拠に乏しいため、括弧を入れた。

(19)註11の岩根の調査によれば、「先代は担いだんじりで村の人で彫物を分ける。」としているが、根拠に乏しいため、括弧を入れた。
(20)註11の岩根の調査によれば、「初代は担い地車で上瓦屋(泉佐野市)に売却。」としているが、根拠に乏しいため、括弧を入れた。
(21)註11の岩根の調査によれば、「担い地車があったが、明治後期にまくって廃絶した。」としているが、根拠に乏しいため、括弧を入れた。
(22)註11の岩根の調査によれば、「先代は担い地車。」としているが、根拠に乏しいため、括弧を入れた。
(23)註22参照。
(24)註11の岩根の調査によれば、「先代は担い地車で風呂のたきつけに使ったと言う。」としているが、根拠に乏しいため、括弧を入れた。
(25)註11の岩根の調査によれば、「大正5、6年頃に組立式の担い地車廃絶。」としているが、根拠に乏しいため、括弧を入れた。
(26)註11の岩根の調査によれば、「明治から大正にかけては嘉祥寺の北出・西出・上出にそれぞれ担い地車があった。」としているが、根拠に乏しいため、括弧を入れた。
(27)紀の川筋の担いだんじりについては吉村旭輝(二〇一八)「紀の川筋の祭礼における地車と河根の地車」九度山町文化財活用地域活性化事業実行委員会編『九度山町文化遺産を活かした地域活性化事業調査報告書(Ⅱ)』、九度山町文化財活用地域活性化事業実行委員会で考察をしている。
(28)泉南市史編纂委員会編(一九八七)『泉南市史』通史編、泉南市所収。
(29)西田七之助(一九五五(二〇〇〇復刻))『樽井町誌』、『樽井町誌』復刻委員会。
(30)註28、29、および西鳥取村誌編纂委員編(一九三〇)『泉南郡西鳥取村誌』西鳥取村役場。東鳥取村(一九五八)『東鳥取村誌』東鳥取村役場参照。
(31)仲村研(一九七八)「信達神社の祭礼組織」『泉南市史紀要』五、泉南市参照。

(32)現在の祭礼の流れは実地調査によって、またかつての祭礼のようすは阪南町史編さん委員会編(一九八三・七七)『阪南町史』上・下、阪南町役場を参照した。

(33)現在の祭礼の流れは実地調査によって、またかつての祭礼のようすは註28を参照した。

(34)森杉夫編(一九八六)『岸和田市史史料第三輯　和泉国正保村高帳』岸和田市所収。

(35)泉佐野市史編さん委員会編(二〇〇九)『新修泉佐野市史』二　通史編近世、清文堂出版、および田尻町史編纂委員会編(二〇〇六)『田尻町史』歴史編、田尻町参照。

(36)米田頼司(二〇一〇)『和歌祭　風流の祭典の社会誌』帯伊書店所収。

(37)橋本市史編さん委員会編(二〇〇五)『橋本市史』近世史料Ⅱ、橋本市所収。

(38)田尻町編纂委員会編(二〇〇六)参照。

(39)泉佐野市史編さん委員会編(二〇〇八)『新修泉佐野市史』一　通史編自然～中世、清文堂出版参照。

(40)大澤研一(二〇一二)「戦国期摂河泉における本願寺の地域編成について」『市大日本史』一五、大阪市立大学日本史学会参照。